

# 保育園の「砂場」を見なおす

——砂場の実態調査と砂遊びの実践を踏まえて——

栗山陽子  
酒井教子  
江上信子

## 1. はじめに

日本がかつて経験した高度経済成長は、産業の近代化と都市化、情報化の社会を押し進めていく中で、身近にあった様々な自然物を喪失させてしまった。その一つが土である。道は隅々まで舗装され、生活が便利で快適になった分、土という自然を都市や町的生活圏から無くしてしまった。子ども達が、かろうじて土の上に立って遊ぶ、土に触れて遊ぶことができるのは、今や学校、保育園、幼稚園、児童公園などの限られた場所だけだといっても過言ではない。しかも、学童期の子ども達は、塾通いや電子ゲームの普及、犯罪などの影響で外で遊ぶことが急減し、子どもが土に触れること自体が減少してしまった。一方、就学前の幼児のほとんどは、幼稚園か保育園に通っていて、日中、土に触れて遊ぶことができる環境の中にいる。乳児<sup>(注1)</sup>も、全国平均2割の数は、保育園等で生活していて、園庭に設置された砂場などで、土や砂に触れて遊ぶことができるのである。

筆者らは、現在、『自然保育研究会』で、「子どものしなやかな心とからだを拓く」をテーマに、自然環境の土、水、泥が子どもの発達に有効であることを、保育現場での実践を通して明らかにする研究を重ねている。その研究過程で、上述の通り、かけがえのない土が存在する保育園の園庭に設置されている砂場に着目した。そもそも砂場は、保育環境としての長い歴史を持ち、乳幼児の成長発達に必要な遊び場としての役割を果たしてきた。しかし、近年、「砂場でのダイナミックな遊びが見られない」「砂場の衛生管理が大変で、砂遊びが減っている」「子どもが砂にまみれたりすることに抵抗を示す親がいる」などの声を耳にするようになり、折角子どもの身近にある砂場が、気がかりな状況になってきている。

そこで、本研究で、保育園の砂場の利用状況を調べ、砂場の実践を掘り起こし、砂場の今日的意義を考え、有効で価値ある遊び場となるようにしたいと考えた。

本稿は、砂場遊びを積極的に行っている5保育園を抽出し、砂場の実態調査を行い、その結果を分析・考察した。また、砂場遊びの実践を二つ取り上げ、分析・考察をした。そして、これらをまとめ、砂場の見なおしの方向を示した。

## 2. 研究方法

### (1) 対象

研究対象には、愛知県下の3市の公立保育園、E園、F園、G園と私立保育園、H園、I園を抽出した。抽出の条件は、0歳児～5歳児が入所していること、砂遊びに関心を持っている園であること、研究に積極的であることなどである。

### (2) 方法

研究方法は、アンケート調査と5保育園を訪問して得た聴き取り、及び砂場遊びの実践記録の分析と考察を行った。

本文中に掲載している写真は、子どもの顔が判明するものについては、保護者の掲載許可を取ったものである。

## 3. 砂場の価値と保育所における役割

### (1) 砂場の価値

J. Jルソーは、著書『エミール』(1762)で「乳幼児期を尊重せよ」とし、「自然がこどもに試練を与え、こどもを鍛える。」と述べた。また、1840年世界で最初の幼稚園を創設したフレーベルは、園庭を考案し、身近な環境との関わりを通して自然の法則を認識する指導の方法を示した。子ども時代を大切にしたい200年以上前の二人の教育思想家は、自然が子ども達にとって大切なものであるという認識をすでに持っていた。彼らの想いを、いまの時代にこそ思い起こさなければならぬと思う。そして、自然の要素を備えた砂場が、いかに乳幼児期に相応しい遊び場であるかを認識しなければならない。

哲学者ロバート・フルガムは、著書に『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』(1990)という題名をつけた。「幼稚園」とせず「幼稚園の砂場」と言っていることに砂場の重要性を見いだすことができる。

日本では、子どもの遊び場づくりを手がけた仙田満が、「砂場はどんな遊具よりも優れていると思う。30年近くたった今もまだそのような遊具を作ることができない。」<sup>(註2)</sup>と述べている。このことは、砂場がずっと、魅力ある、価値ある子どもの遊び場として、不動の位置を占めてきたことを裏付けている。

笠間浩幸は、日本の砂場の歴史について、幼児教育施設における1916年(大正5年)の「幼稚園令」で砂場設置の義務化が行われ、砂場が「当たり前」の遊び場になったこと。また、この時期に新しい教育方法が紹介される中で、砂場は、「子どもが自由に、そして創造的に遊びを展開することが許される場所」であり、「新しい保育の象徴」となったことを述べている。<sup>(註3)</sup>

砂場の価値としては、砂場が、身近で魅力的な自然物の砂を子ども達に与える場所として作られており、子どもたちが、自由に砂に触り、創造的に遊び、そこから様々なことを学んでいくことが期待できることである。そして、保育園には、どこにでも設置され、子どもの遊び場として広く認知されているということである。

## (2) 保育園における砂場の役割

笠間は子どもの発達の視点から子どもたちの砂遊びを観察する中で、砂遊びの中で大きな変化と発展が見られたことを指摘し、砂遊びについて、以下の3つの視点から分析している<sup>(註4)</sup>。

第一に、「子どもの発達の可能性」として、子どもの体と感性、想像力・創造性、科学性、ことば、情緒・社会性などをあげている。次に、「遊び空間の魅力」として、子どもの居場所としての要素、あいまいな関係性をあげている。さらに、「子どもの遊びと学び」からその関係性について述べ、小さな子どもたちにとって結果としての知識でなく、「知識に至る過程を身をもって体験すること」の重要性を指摘している。笠間がまとめた砂遊びの3つの視点こそ、子どもの発達を支える砂場が持っている役割であると考えられる。

現在子どもをとりまく環境は、身近な自然環境が失われているだけでなく、砂という自然物を取り入れた子どものために作られた砂場でさえ遊ぶ機会が少なくなっている。

保育園で長い時間を過している乳幼児にとって、一番身近な環境が保育室や園庭である。特に園庭に設置されている砂場は、いつでも自然物である砂に触れ遊ぶことが保障されている環境である。そして、そこで毎日のように展開される砂遊びは、子どもたちの発達を保障するものであり、自然物を利用した遊びを、自由に創造的に展開することを可能にするものである。それ故、保育園における砂場の役割は大きいといえる。

## 4. アンケート調査

### (1) 調査対象

3市内の公立保育園 E 園、F 園、G 園、私立保育園 H 園、I 園の各幼児担当保育士及び乳児担当保育士

### (2) アンケートの質問項目

【質問1】「子ども達は、砂場でどのような遊びをしていますか」

保育園において笠間が言う「遊び空間としての魅力」である砂場で、よく遊んでいると思われる砂遊びの項目を7つ挙げ、その頻度を4段階で尋ねることで、乳児と幼児の砂場での遊び方の違いや最近の傾向を掴みたいと考えた。また、新しい砂場の遊び方を探るために、「その他の砂遊びをする（具体的に記入）」の項目を設けた。

【質問2】「砂場遊びによって子どものどんな発達が期待できますか」

笠間の「子どもの発達の可能性」として実践研究から認識された子どもの発達項目を7つ挙げ、保育士の期待感の度合いを4段階で尋ねた。また、新しい発達への期待感があるかどうかを知るために、「その他期待できること（具体的に記入）」の項目を設けた。

【質問3】「砂場の衛生管理で行っていることを書いて下さい」

近年、砂場の不衛生さが指摘され、子どもを砂場で遊ばせたくないという親がいるなどから、保育園では、砂場の衛生管理に苦労しているという声が聞かれるので、その実態を掴みたいと考えた。

【質問4】泥場の設置（砂場遊び以外で、泥遊びが出来る場所）の有無を尋ねた。

【質問5】泥場の必要性を尋ね、砂場以外の新たな「人の手を加えた遊び場としての泥場」の設置が、砂場の見なおしの方策の一つにならないかと考えた。

【質問6】設置され活用されている砂場について、問題点、感想、意見、提案などを自由記述で求め、今回の砂場の見なおしの研究に活かしたいと考えた。

(2) 5保育園のアンケート集計結果（回収率 100%）

【質問1】こども達は、砂場でどのような遊びをしているか

表1

項目	頻度と乳児組・幼児組別		いつもやる		よくやる		時々やる		やらない	
	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児
①砂山を作る			4	4	1	1				
②砂山にトンネルを掘る			1	3	1	2	3			
③砂に水を入れる	1		1	3	1	2	2			
④砂で団子やカップケーキを作る	4	1	1	4						
⑤砂場に遊び道具を持ち込んで遊ぶ	3	2	2	3						
⑥大型スコップを使う	1	2	3	2		1	1			
⑦砂場では裸足で遊ぶ		1	2	2	3	2				

⑧その他の砂遊びをする

- ・砂でままごと、見立て、つもり遊びをする。1輪車や入れ物で砂を運ぶ。宝探しをする。
- ・さら砂（すな）作り、粘土こすり、草花やドングリや葉っぱを使ったご馳走作り

【質問2】砂場遊びで子どものどんな発達が期待できるか

表2

項目	頻度と乳児組・幼児組別		かなり期待できる		期待できる		あまり期待できない		ほとんど期待できない	
	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児	乳児	幼児
①子どもの体力作りができる		1	4	3	1	1				
②子どもの想像力や創造性が培われる	5	5								
③子どもの科学性が培われる	1	2	2	3	2					
④子どものことばが育まれる	3	3	2	2						
⑤子どもの仲間関係が育つ	3	5	2							
⑥子どもの情緒や社会性が育まれる	1	4	3	1	1					
⑦子どもの居場所としての要素がある	1	3	3	2	1					

⑧その他期待できること

- ・砂運び、水運びで、遊びの広がりがある。
- ・約束を守って遊びができる。
- ・遊び込みができ、作った喜びや達成感を味わうことができる。

【質問3】砂場の衛生管理で行っていること

- ①週に1回の消毒をする ②年4回業者による消毒を行う（費用157500円/年）
- ③砂場の清掃 ④猫よけシートを毎日取り外しする
- ⑤砂を砂場から出し、天日干しにする（月1回）

【質問4】泥場について

- ①ある（3園） ②ない（2園）

【質問5】泥場は必要か（泥場が無いと答えた園）

- ①必要（1園） ②必要ではない（1園）

【質問6】砂場についての意見

- ①砂や水は、自在に変化し、子ども誰もが感触を楽しんで触りたくなる不思議な素材である。
- ②砂場は、ごっこ遊びなどで、コミュニケーション力、協力心、やり遂げる力が伸びる素敵な場所である。
- ③砂場遊びが、パターン化してしまっているのが、他園からの面白い砂場遊びの情報が欲しい。
- ④子ども達で作った団子や砂作品、さら砂の保管場所で悩んでいる。
- ⑤保育園の砂場は、「きれい」というイメージがあり、地域の未就園児が園庭開放の日に、喜んで利用している。
- ⑥砂場の真上は、日よけがあるが、回りには日よけがなく、夏季は、炎天下では遊べない。
- ⑦冬季は、砂が冷たく、乳児には遊びづらい。
- ⑧砂場が、蚊が発生しやすい場所にあるため、押し込んで遊んでいると刺されてしまう。
- ⑨猫よけネットを掛けているが、軽くて耐久性のある、扱いやすいネットがあるとよい。
- ⑩砂が砂場から流失（子どもが持ち出す・雨で流れる）してしまい困っている。（3ヶ園）

（3）分析と考察

【質問1】砂場でどのような遊びをしているか（表1）では、乳児は、「砂場にしゃがんで、手で砂を握りしめる。両手で砂を固める。スコップを使い、器に砂を入れる。などの砂遊びを、いつもしている。」幼児は、「立って、大型スコップで砂山を作る。しゃがんで掘るなど、友だちと一緒にやる砂遊びをよくする。」という結果出て、乳児と幼児の遊びの特徴とその違いがはっきり表れた。これらの結果は、砂場で子ども達が遊ぶ姿としては、乳児幼児のそれぞれの発達の特性を表していて、ごく自然な姿と言える。

「③砂に水を入れる」「⑦砂場では裸足で遊ぶ」に関しては、保育者の環境づくりにより、乳幼児問わずその遊びが実現できると考えるが、「③砂に水を入れる」については、乳児では「やらない」と答えた園が4割あった。また、「⑦砂場では裸足で遊ぶ」も、幼児より乳児が少なかった。この結果は、最近の傾向として、乳児が砂まみれになることや裸足になることは、清潔面や遊んだ後の後始末の大変さで抵抗があるからではないかと思われる。

そこで、私達は、砂遊びを見なおしていく方向として、これらの乳児の砂遊びの内容に注目しておきたいと考えている。丸山尚子らは、著書『手で考える』（1981）の中で、「人間の手について

て、長くて自由に動く5本の指を持っているが、指先の指紋の役割の重要性を忘れてはならない。指先、手のひらの皮膚感覚が、ものをつかみ、にぎり、道具を使う上で、重要な役割を果たしている<sup>(注5)</sup>と述べている。皮膚感覚は、足の指先、足の裏の皮膚感覚でも同じことが言え、乳児期から、砂、水、裸足の砂遊びをたっぷり行うことが、手と足の皮膚感覚を刺激することになり、有効な遊び方であると言える。「ふれる手」から「つかむ手」へ、さらに「つかう手」から「つくる手」へと手の働きの巧緻性を高める上で、乳児期の積極的な砂場遊びがその土台づくりとして重要であると考えられる。

【質問2】発達が期待できること(表2)では、「子どもの想像力や創造性が培われる」が、乳児・幼児共に、「かなり期待できる」と全ての園が答えた。砂の特徴から、例えば、山や川を作りながらどんどん変化させていく、また、作っては壊し、壊してはまた作るというように、何度も作り直しができるなど、砂場で、子ども達が、想像力と創造性を働かせて自由に遊んでいる姿が浮かび上がった。さらに、幼児では、「仲間関係が育つ」で「かなり期待できる」と全ての園が答えた。幼児にとって、砂は、個人で遊ぶだけでなく、仲間と遊び空間を共有し、協働して遊ぶ魅力的な自然素材であると言える。

【質問3】砂場の衛生管理では、猫よけシートの毎日の取り外しや砂の天日干しは、保育士の手で行われていて、負担感が感じられた。また、費用を掛けて衛生管理を徹底している園があり、衛生管理には、かなり気を遣っていることが分かった。

【質問4】泥場については、あると答えた園が6割で、ない園を上回り、泥場が、新たな遊び空間として認識され、積極的に設置されていることが実感できた。

今回の研究では、砂場の実践の報告に止まったが、今後、泥場の実践も合わせて研究したいと考えている。



ひと味違う泥場の遊び

【質問6】砂場に対する意見では、砂場の設置条件に関するものが多かった。保育園の砂場が、園庭に人工的に作られた遊び空間であることから考えると、砂場の設置にあたって、子どもにとって魅力ある遊び空間として、良く吟味されて設置されているか疑問を抱いた。

砂場は、湿気が少ない明るい場所で、年間を通して利用できるような工夫が施され、様々な砂遊びが十分保障される広さがある魅力的な場所として、保育園や幼稚園に設置されなければならないと考える。

## 5. 砂場遊びの実践

### (1) 砂場遊びが団結力を育てたE園の年長クラスの実践

E園 B市公立保育園 在籍105人 年長クラス構成 女子20人 男子6人 計26人  
砂場は園庭の西の端にあり、隣のアパートや畑とフェンス1枚でつながっている。夏場は蚊や虫が多く、砂遊びは保護者の理解と協力が必要だった。そのために、砂場での遊びが近年少なくなっている現状がある。

1) 4月当初のこども達の姿

春、朝夕の園庭遊びの時間は、幼児3クラスと一緒に遊んでおり、年長児は砂場よりも数人で追いかけてっこをしたり、鉄棒をしたり、集団遊びをしたりする姿が多くみられる。

2) 6月～9月の砂場遊びの様子

6月11日

クラス全員に経験して欲しいので、主活動として、全員が砂場で泥だんごづくりをする。まずは担任が丸くてピカピカのだんごを作って見せることで、子どもたちもやる気になり、1時間近く誰も抜けていくことなく続いた。「くずれてもまたすぐ作り直せること」「白砂をかけては磨く繰り返しが多いほどピカピカになること」「磨くときはジャージの切れ端で磨くとよいこと」など子どもたちに教えながら一緒に楽しんだ。



ピカピカ目指せ!泥だんご作り

基本の泥だんごを作るときの泥の感触、握る時の力入れ具合、磨くための白砂のサラサラした感触、布を使って磨くときの力加減など、泥だんごといっても奥が深い。砂の感触をおっかなびっくり味わった0歳児の頃、ひたすら大人と一緒にプリンを作った1歳児の頃、拾ってきたドングリを飾ってドングリケーキを作った2歳児の頃、大きなスコップを使えるようになり山づくりが楽しくなった3歳児の頃、5歳児を真似て白砂集めをした4歳児の頃、これらの年齢を経て、クラスみんなで泥だんごづくりが楽しめるようになった5歳児の現在の様子である。今までの経験がひとつになって、今の姿につながっていると思うと、砂遊び一つをとっても、保育園生活の醍醐味を感じずにはおられない。

7月1日

水着の上にTシャツを着て砂場で泥んこ遊びをした。始めはみんなでスコップを使って大山を作っていたが、6人しかいない男の子から、急に「男対女で競争だ」と声が上がり山づくりの競争が始まった。いつも女の子の勢いに押され気味の男の子だが、6人が協力して一つの山を作る姿に団結力を感じた。結果は、さすがに20:6の壁は厚く、若干女の子チームの山のほうが大きかったが、男の子たちは勝敗にこだわる様子はなく、次は山にトンネルを掘り始めた。

十分山づくりを楽しめたころ、砂場にホースで水を流し込み、水たまりに飛び込んだり、座り込んだりして泥水の感触を楽しんだ。みんな口々に「楽しかったね～」と言い合い、満足そうな笑顔から開放感を味わったのがよく分かった。(夏まつりを一週間後に控えて、太鼓の練習をする日が続いていて、しばらく外遊びが出来なかった。)



トンネルどこまで掘れたかな?

### 3) 卒園を控えた子ども達の姿

その後も表現活動や運動でも一人ひとり是个性的で素敵な6人の男の子だったがクラスの中では女の子の勢いに押されている感じがあった。冬になり室内遊びが増えたある日、男の子の一人が迷路を書き始めた。それを見た男の子数人が真似をして迷路を描き、迷路のすべてがつながっていた。担任にほめてもらおうと次の日も次の日も迷路を描き、6人全員の男の子が遊びに加わり、すべてつながっていく大作ができ上がった。7ヶ月前に砂遊びで経験した6人で協力する喜びを、6人の子ども達が再度実感できた瞬間だった。

## (2) 分析と考察

6月の泥だんごづくりやピカピカだんごづくりの実践の場面では、乳児組から幼児組にかけて砂場遊びが変化し、年長組での多様な展開例を示し、砂場遊びに見られる保育園生活の醍醐味を伝えている。また年長組の男の子たちにとって砂や泥は、自由に作ったり壊したりすることのできる貴重な自然素材であり、山づくりの共同作業を経験し成長した姿が示されている。E保育園の砂遊びの実践を、笠間の砂場における子ども発達の視点もとに分析した。

### 1) 砂場は文化空間

近年、砂場での遊びが地域でも機会が少なくなっている。E保育園でも保護者からの虫刺されや衛生面への対策の要望もあり、なかなか砂場でクラス全員が遊ぶ機会が少なくなっていることを苦慮している。その中で担任は、保護者の理解と協力を得ながら砂遊びや泥だんご、泥んこ遊びを引き続き子どもたちに経験させようと、継続的に取り組んでいる。このことに重要な意味があると考え。つまり、砂場での実践は、子どもに意識的に「文化空間」<sup>(注6)</sup>を保障している実践と言える。

### 2) 子どもの発達を保障する空間

乳児では砂場遊びで感覚機能を豊かにしながら外の世界に触れることができる。砂は子どもの皮膚感覚を刺激してくれる。幼児期にかけて砂を変化させながら遊ぶことにより、手指や腕やスコップやシャベルなどの道具も使い、身体感覚をコントロールできる能力が育っている。特に6月の泥だんごづくりでは、砂の湿り具合と土の混ぜ具合や砂と土の性質を知り、白砂をかけて磨いたり、布で磨いたりする作業を通じて科学的知識を学んでいるといえる。E保育園での担任の砂場での遊びの取り組みの過程を読むと、乳児組から幼児組にかけて子どもの発達の可能性を保障している実践であることが読み取れる。

### 3) 砂場は子どもをつなぐ空間

人数も少なく、女の子の中で自信がもてなかった男の子達にとって、砂や泥は自由に作ったり壊したりすることができる自然素材である。特に年長組になると、友達と一緒に大きな山やトンネルを大騒ぎして作ったり壊したりしてダイナミックに遊ぶ経験ができ、友だちの存在の大切さを実感させてくれる。砂場の遊びの実践記録からは、女の子に対抗して「より大きな山をつくる」という目的のために、男の子達が団結し、自ら人間関係を結んでいったことがわかる。この力を合わせた経験を、次の迷路あそびの大作づくりに繋いでいったと考えられる。



### (3) 土山を崩して遊ぶH園の実践

H園 B市私立保育園 在籍 120人

0歳児 18人 1歳児 18人 2歳児 19人 3歳児 23人 4歳児 19人 5歳児 23人

砂場の環境としては、園庭の南東の端にあり、砂場の周りにはベンチや小屋がある。砂場に隣接し、園庭の東側約半分の中央に、トラック2台分の土で、自由に遊べる大きな土山をつくった。

#### 1) 4月当初の子ども達の姿

H園では「とことんあそびこむ」保育をめざして新年度の保育をスタートさせた。ところが入園して元気がない子や園庭でも遊べない子がいて、この「大変さ」をどう「楽しさ」に変えるのか試行錯誤が始まった。

「園庭で自由に遊んでいいよ」という保育者の姿勢では、新しい環境に不安を感じている新入園児にとって、どう遊んで良いにか分からず、かえってプレッシャーになっていることが分かった。

新入園児の観察を続ける中で、砂場なら落着ける子がいて砂場が遊びの入り口になっていることが見えてきた。

#### 2) 土山登りと土山崩し

安心して砂場で遊ぶためには、遊びを保障する空間や広さが必要と決断し、砂場の横に大きな土山を新しく作った。砂場や土山の横で「平行あそび」や「やりとりあそび」をする子がいても充分遊べる広さになった。また水を使ってドロドロにできる場をつくったり、腰をかけたりコップを並べたりできる場をつくって、広い空間で遊べるような環境づくりをした。



台は腰かけたりコップを並べたり

4月後半からは、土山にまず全身を使って登り、ころがる楽しさを満喫した。山に登ったり、下ったりして思いっきり遊びながら、次第に土山を崩しながら遊ぶ姿が出てきた。年齢により土との触れ合いや遊ぶ姿がどんどん変わっていった。

幼児は、土山を削って水を使い川を作って遊んだ。その中で友だちとつながり、力を合わせて遊ぶ楽しさを十分味わっていた。

乳児は、幼児がくずした土で、身体全体土にまみれて、その感触を楽しんだり、団子やケーキづくりのみたて遊びをしたりしてたっぷり楽しんだ。子どもたちは、砂場や土山をきっかけに、朝からずっと満足するまで園庭で遊ぶようになった。

#### 3) 9月の頃

砂場や土山でとことん遊ぶ子どもの姿が見られるようになったことで、今まで「遊べていない子ども」として子どもに問題があると捉えていたが、土山遊びの実践を通して、「子ども達がほんとうに遊びたいと思う環境でなかったのではないか？」と園の環境を見なおす視点が生まれた。

また泥んこへの抵抗がある子どもに対しても、土山をくずしながら遊ぶ中で徐々に泥んこ遊びの面白さが伝わるようになった。一方、保育士の考えで、良いと思うおもちゃを選んで出して

いたが、「子どもが遊びたいおもちゃを出す」「子どもは遊びたいから出す」「満足して遊ぶには、自由におもちゃを出す環境が必要」と発想を変え見なおした。土山が、平らになるほど子ども達が遊び込んだ頃、保育士達は、自らの保育を見なおしすることができた。



削って掘って低くなった土山

#### (4) 分析と考察

H保育園は都心のビルが見える環境にある。地方にある自然の多い園のようにはいかないが、ひとつの取り組みとして砂場の横に大きな土山をつくった。砂場と土山を中心に「とことんあそびこむ保育」を大切にしていることが分かる。H保育園の土山の遊びの実践を、笠間の砂場における発達の視点で分析した。

##### 1) 居場所としての魅力

H保育園の実践では、入園当初の遊べない子どもや園庭での遊びが見つからない子どもの遊びの入り口として、「砂場」に注目し、それに隣接する場所に大きな土山を作った。このことで、平坦では味わえない高い場所で遊ぶことの特別な心地よさを子ども達が身をもって示してくれた。在園児に混じって新入園児も、土山に登ったり、下りたり、転がったり、全身で遊びこんだのである。土を高く積んだシンプルな構造のこの土山が、砂場以上に、「多様な遊びの広がりをも可能にする場」「特別な居心地の良さを感じさせる場」<sup>(注7)</sup>になることを証明する意義深い実践である。一方園庭でも、遊具や竹馬で遊ぶ子どももいて、子どもたちは朝からずっと満足するまで園庭や砂場や土山で遊ぶようになり、園庭全体が子どもの居場所になっていった実践といえる。

##### 2) 「子ども理解」を深める職員集団

H保育園では、まず子どもの居場所としての砂場を大切にしている。自由につくったりこわしたりまたつくったりして遊ぶ中で、子どもは居心地のよさを感じている。多人数でも遊べるように、砂場と土山という2つの広い空間や砂、土、泥、水など多様な自然素材や道具などの環境を保障している。そして子どもたちが、ゆったりと遊ぶ時間を保証していることがわかる。

このことは、職員間で「遊べていない子ども」という捉え方が問題になり、「今まで遊べる環境でなかったのではないか？」と園庭の環境を見なおし、園庭の環境づくりに取り組んだ結果と考えられる。

H保育園では「遊べていない子ども」について何回も話し合っている。保育者同士で子どもの話しをする中で「子どもに寄り添う」姿勢や「子ども理解」を深めている<sup>(注8)</sup>。

「子ども理解」が深まる中で、保育士達は、自らの保育を見なおし、園庭の環境を見なおし、今回のような、砂場や土山づくりの実践に取り組んできたことがわかった。

## 6. まとめ

今回の実態調査や実践記録から、子どもたちは、本当に多くのことを日々砂場で学び成長していることがわかった。特に保育園では、子どもたちは早朝から夕刻遅くまで長時間に渡って園で生活している。保育現場では、子どもの生活と遊びの質の向上が常に問われている。毎日繰り返されている砂場で遊ぶ時間は、子どもの発達を保障する貴重な遊びの時間であると認識する必要がある。

そして、子どもが遊びたくなるような保育環境に砂場を捉えなおしていくことが大切である。費用はかかるが、砂遊びを発展させた泥場の設置や今回の実践に学んで、土山遊びができる環境づくりを目指していく必要があると考える。

今回の研究で、砂場という空間が大きな役割を果たしていることが確認できた。このことを通して、土、水、泥という自然素材が、乳幼児期の原体験に深く関わり、将来にわたって子どものこころとからだを拓く上で、有効性が高いものであることの確信へ一歩近づくことができた。

さらに、今回の研究は、「どの子ども安心して育つ場所としての保育園の役割」を再認識する機会となった。そして、保育現場には、埋もれた実践があることも今回の調査で実感できた。

子ども学を研究する私達は、子どもの心に寄り添い子ども理解を深めながら実践している保育者集団と共同して研究を進め、子どもが育っていく環境づくりをしていきたいと願っている。

## 7. 今後の課題

今後の課題として、今回は少数の保育園を調査対象としたが、幼稚園なども対象に幅広く砂遊びや泥遊びの実態調査を続け、実践記録の整理や分析を行い、砂場を見なおす研究を続けたい。

また、今回は触れなかったが、最近進んでいる園庭の芝生化によって、園庭からも土が無くなっていくと危惧され、園庭の実態とともに、芝生化のメリット、デメリットの検討の必要性を感じる。さらに、今回のこども子育て新システムの導入で、待機児童解消の名の下に、園庭そのものが無い3歳未満児の保育所が、公的保育として認められて、増えていくことが予想される。それは、これまで築き上げてきた園庭あそび（特に砂遊び）での乳児の発達保障がくずされていくようで、子どもの視点で考えると深刻な問題である。

今回の調査に協力してくれた保育者は、「この調査をきっかけに再認識した砂場遊びの大切さを、周囲の保育者や保護者に伝えていきたい」と話していた。私達も、今回の「砂場遊びの実態調査」を通じて明らかになった「砂場遊び」の持つ重要性和砂場の見なおしの方向性を広く伝えるため、今後も研究を深めていきたいと考えている。

最後に、2011年3月11日に起きた「東日本大震災」のことに触れておきたい。

同時に起きた福島第一原子力発電所事故の大惨事によって、「土」が放射能で汚染され、計り知れない被害が出た。汚染された地域では、子ども達が外で遊ぶことも土に触れることもできなくなってしまった。その現実がこころが痛む。安全で安心できる状態に復元される日が、一日でも早く来ることを願っている。

【参考文献】

- ジャン・ジャック・ルソー著 (1762) 『エミール』 全上・中・下 今野一雄訳 岩波書店  
ロバート・フルガム著 (1990) 『人生に必要な知恵は、全て幼稚園の砂場で学んだ』 池央耿訳 河出書房出版社  
荘司雅子著 (1973) 『フレーベル人間教育入門』 明治図書  
仙田満著 (1992) 『子どもとあそび』 岩波書店  
丸山尚子・とくしま “手の労働” 研究会編著 (1981) 『手で考える』 黎明書房  
笠間浩幸著 (2001) 『〈砂場〉と子ども』 東洋館出版社  
季刊発行(2009) 『現代と保育 75号』 ひとなる書房

【注】

- (1)乳児とは、保育所に入所している3歳未満児を指す  
(2)仙田満著『子どもとあそび』 p 10～11  
(3)笠間浩幸著『〈砂場〉と子ども』 p 39,p50  
(4)笠間浩幸著『〈砂場〉と子ども』 p 130～p 154  
(5)丸山尚子・とくしま “手の労働” 研究会編『手で考える』 P 47  
(6)笠間浩幸著『〈砂場〉と子ども』 P 4～P 5  
(7)大宮勇雄・田中孝彦・平松知子鼎談「いま『子ども理解』を深めるとはどういうことか」『現代と保育』  
第75号 p 65～p 69

栗山陽子 (名古屋経営短期大学子ども学科 教授)  
酒井教子 (名古屋市立大学 研究員)  
江上信子 (名古屋文化保育園専門学校 教員)